

(銅製金具)。

鑿 出し鑿一式

四年

彫金 手板模刻。仁王像、銅板打出し。鷲、鉄地に銀の鷲を象嵌、足は四分一、マクレを立てた象嵌法と研切りの象嵌法とを併用。獅子メヌキ一対模刻。

付記 指導法については、生徒各人の手板模刻を先生に修正して貰う時に個人指導で行われた。その時生徒は、先生の鑿の使い方、仕事の運び具合等を詳細に観察し、技術のコツ、機微というか言葉で説明できないものを自分なりに感受する、つまり目で学ぶことを厳しく仕付けられた。また、在学中は伝統的技術の修得が第一義的で創作活動は堅く禁じられ、展覧会に出品できず歯痒い思いをした。

⑫ 昭和初期の鍛金科

左記は三井安蘇夫氏(昭和八年金工科鍛金部卒)の回想(昭和六十年四月三十日談話筆記)である。

入学した頃は予科はなく、直ちに鍛金の教室に入り、机を貰って午前中は実技(金工以外に日本画とデッサンが二年まで、塑造は三年まで必修)、午後から学科があった。ただし、午前中の実技の前に朝早くから体操ないし教練があり、正木校長の修身があった。教練は一年か二年のときにやり、工芸と彫刻と建築、日本画と油絵が一緒、師範科は別、というようにうまく人数の配分をして、三つ四

つに切ってやっていた。朝の八時ごろから出席を非常に厳重にチェックされた。正木さんの話がとつとつとしていて、内容が豊かで面白かった。高学年になるにつれて学科がなくなり、四年になると殆ど実技だけになった。

鍛金の実技は、四年まで基礎の課題が組まれていた。ある程度は選択できるようになっていて、三年になると石田英一先生の作った天平美人が課題にあり、それを模刻してもよく、自分で作ってもよかった。

私が学校に入ってからすぐには石田先生がパリに行っていたので藤本万作先生と野口六三先生の二人で授業を見て下さった。一年生の最初は杯で、三つ組(三重)の杯を銅で作った。教えるというより、先生が丁寧にやってみせて、それを生徒がやってみた。いい加減な所で妥協してくれず、傷があるかないか手で触ってみて、指の先に凹凸を感じると、均らし槌を使って傷付けて返される。それをまた奇麗に傷を取って叩かなければならない。また持っていてまたやられる。一ミリの地金が薄くなるまで叩かされる。それで、中を砥石で研げば平らになって轆轤をかけたみたいになる、そこまで奇麗に叩かなければならない。昔は轆轤がけや旋盤をかけたりしないで、打ったらそのまますぐに白砥で奇麗にして、なぐら砥石で研いで炭で研いで仕上げを持っていく。三つ組の杯を作るのに夏休みまでかかった。そういう仕込み方だから、ががつやる。今の学生と比べものにならない程やる。奇麗にならないと却って時間がかかるから奇麗に打つ。そればかりやっていると疲れるので次の課題をやる。被せ蓋の香合、その次が印籠蓋。香合は夏休み前に作ったのを

九月に提出した。香合も蓋を持ってすーっと吸い付いて上がってき
て、ぼたんと落ちるように作る。そこまでやらせる。徹頭徹尾、職
人がお弟子さんを仕込む様に仕込まれた。印籠蓋の香合も同じであ
った。作った香合に模様を彫ると歪みができるので模様をつけない
で奇麗にしまっておいた。それから一輪差しを作った。大きさは、
地金の幅が三六センチで、その半分の一八センチの円で作った。手
本にある銀の口の、上が厚い丸いものと巻き込みになっているもの
と二つ作った。皆、同じものを作るので、並べてみれば形の変わっ
たものはすぐにわかる。そのほかに後期になって自由制作があっ
て、ある程度、自分でデザインしていかなければならなかった。先
生に口頭で課題を追加されたりもした。杯の次が香合二つ、それか
ら一輪差しに自由制作で一年は終わりであった。二年になると、栗
と椎の実がついた一番初歩的な打ち出しがある。それから三つ足の
香炉、そしてお盆を打たされた。

それまでは、一番使い易い銅を使った。真鍮を使ってもよく、自
由課題と香炉の蓋も真鍮で作った。普通の制作はみな自分で購入し
た。地金が支給されたのは卒業制作だけであった。

三年、四年になると課題が出て自分で原形を作るか又は模作でも
かまわない。課題がみっちりやられるのは三年までで、菓子鉢と水
滴が課題であった。菓子鉢で初めて鉄を使い、ぎゅーっと押し込め
てびしっと止まっていなければいけない、口のところでばちっと合
うようにして止めた。細口の小さな水滴で初めて銀を打った。あと
は自由制作みたいなかたちで花瓶を打てとか、口の付いた銚子と
か、選択的にこの中から自分でやりたいものをやりなさいと言われ

て作った。四年になると自由課題をやればよく、展覧会に出しても
よかったので我々の頃は殆ど夏休み前から展覧会の出品作品を作っ
ていた。

卒業制作の費用は学校が現物支給で地金をくれた。デザインと大
きさを先生に報告して、例えば銅がどれくらいとか、真鍮、黒味
銅、銀、金、それぞれ要求して現物で貰った。全体の費用は規定の
限度が彫金と鍛金とは違っていた。彫金は花瓶なら花瓶を打物師
に頼むから比較的金がかかった。鍛金はその当時のお金で五十円
限度だった。当時の初任給は、美術学校を出て教員になると、師範
科でも本科でも七十五円、図案科を出て広告会社勤めると五十五
円ぐらいなので、一か月の月給ぐらい貰ったことになる。卒業制作
の採点は、金工科で彫金と鍛金は一緒に採点したが、相互にあまり
干渉はしなかった。

二年まで彫金と鍛金を交代に習った。一年間の中で三分の一くら
い、彫金を習いに行った。我々は彫金をあまり熱心にやらなかった
が、簡単な目貫までやった。銀の鯡の刀の目貫を模刻した。それか
ら象嵌をやり、軽く打ち出した物とか、上から肉をつけて彫ると
か、線象嵌、毛彫りをやった。一番初めが毛彫りであった。全部手
板で、二年までは殆ど同じ程度で時間が多分、彫金の方が少しは
上をいっている。

鍛金の教官は石田英一先生と野口六三先生、その他に非常勤講師
で藤本万作先生即ち藤本長邦さんの親父さんがいた。芸大の鍛金は
平田宗幸派だが、藤本先生は平田派ではなかった。平田派は徳川御
用達で徳川出入りの職人だったが、江戸の終わりか明治の初年頃、

宗幸の前で二派に分かれた。宗幸は養子で平田派を継がれた。我々は宗幸さんの方が正統派だと思っている。その平田派の影響を直接に受けた石田先生と野口先生が学校に来ていた。

藤本さんは教えるというより実践的であった。職人あがりの先生なので、夏は袴をはいて、白足袋はいて、草履で学校に来る。その頃の職人には粋な人が多かった。鍛金の職人は一月の内に十日か半月働けば飯が食えたと言っていた。あとの半月か二十日は飲んで遊んでいた。宵越しのお金はもたないが、持っている内は贅沢に使った。鍛金屋が作った薬罐や銀の花瓶はそのままのもので、逆に彫金屋にもって行って彫らせる人もあった。鍛金は彫金の下打ちだなんて言っていたけれど、鍛金屋がお金持ちになると今度は彫金屋を使った。戦後はアメリカさんが来て、銀器が売れて、鍛金の職人さんはお金持ちになった。

石田先生は非常におおまかな人で、あまり学生に難しいことを言わない先生であった。しかし作品は非常にびしっとしたものである。恐らく近世の名人であった。あの先生についていけるだけの仕事をやった人は今までに卒業した人の中にいないのではなからうか。平田宗幸に教えられて、宗幸を凌ぐだけの鍛金の立体造形をやった人だ。石田先生が最高だと思う。だが、仕事に公式がない。達人になってしまうと、結局表からやっても、裏からやっても、どうでもいい。作ったものがしっかりしていればいいところまでいってしまうのだろう。我々がやると地金が破れてしまうようなことをやっても破れない。そんなに乱暴な扱いをしている。石田先生の作ったものを我々が三年や四年に模倣すると必ず切れてしまう。

切れたら蠟付けしたり、厚い地金を嵌め込んで蠟付けしてメッキでごまかした。でも石田先生がやると、ひどい扱い方をしても破れない。だから本当の打ちものの先生とすれば、石田先生が最初で最後だったのではないだろうか。仕事は学校でやってみせてくれた。見て覚えていく他ないと思った。先生がいなくなると同じことをやってみたりした。

野口先生は石田先生と同郷で、石田先生の後を追って学校に入学した。石田先生があまり細かな事を言わない人で、野口先生はきちようめんで、朝早くに来て、端正な先生らしい先生であった。野口先生に「八田（辰之助）君も不器用だが三井君も不器用ですね」と言われた。僕はそれまで不器用だと言われたことがなかった。どちらかと言えば、器用な方に入っていたつもりであったが、不器用な人は一つのものをも二つ作れと言われた。一つがだめなら二つ、二つがだめなら三つ、それしか仕事を覚える方法はない。できるまでやってみると言われた。

石田先生が外国にいたときは専攻科〔研究〕の学生が補助的な役割を果たしていた。専攻科に残るのは、卒業制作の点数が何点なければならぬとあった。大体皆、専攻科に残った。選科は本科と同じ五年で、特別に実力のあるものは二年に編入された。選科生は殆ど職人の経験者で、彫金選科生も今の大学を出た人などよりうまく、帯留や刀の目貫きの様な「出し彫」をアルバイトで作って生活していた。選科生は本科生と一緒にやっていたが、自分の専攻の実技だけをやらよくて、学科は受けなくてよかった。もぐりて選科生が勝手に工芸の日本画の教室に入って日本画をやったり、彫刻室で彫刻

をやったりしていた。ただし、それは進級の条件にはならなかった。

工芸化学の授業では、材料の成分、分析などを学んだ。写真科の教官であった写真の権威者の森芳太郎先生と鍍金の内藤春治先生、漆の福岡縫太郎先生に習った。漆は塗料で象嵌の実験をした。一ミリ腐食させて、そこに漆を焼付けて埋めて、研いで色付けをした。漆の乾きが悪いと浮いてきた。

地金は今と同じで、特殊な金属だけ（四分一や赤銅）は吹いて作って使用した。アルミニウムは、戦前は量産的な工芸品にはかなり使用されていたが、工芸品の素材としてはあまり使われていない。接合がうまくできなかったこと、腐食すること、着色ができないことなどの理由からだと思う。戦後はアルマイト加工が進歩して手軽に加工してくれる場所ができたこと、それによる腐食の問題がなくなったこと、また色が豊富につけられるようになったので展覧会の出品作品にもアルミニウムの作品が目につくようになった。

道具は自分で作るの、なかなか一年では揃えるところまでできず、三年でぼちぼち作った。当て金は今のものと基本形は同じだが、数が少なかった。同じものは一本か二本きりなかった。今は人数が多くなったから同じ課題をやるのに五、六本は最低必要だが、当時は一本の当て金を待って使ったり、あの道具を使うなら今日は早く行かなければと思ったりした。道具を火に入れて直したり、やすったりひねったりしてはいけない。ほとんど課題に合っているからである。自分の課題は自分で道具を作った。それで道具を作ることを覚えていく。私の卒業制作は道具が合わなくて自分で作った。

道具の面のカーブはひどく難しく、大きすぎても小さすぎてもいけない。あまりびたっとくっついていられないものだ。我々が学生の時はびたっとついていれればその通りにできると思っていたが、そうならない。道具を作ることが非常に難しいとわかってくる。卒業する時までには二十本か三十本作っていった。学校の備品の道具を作る時は今のように外に頼むのではなく、鍛冶屋を連れてきて、ふいごを使って作るのを見て教えてもらう。彫金に七十すぎの助手がいる、鑿の研ぎ方や地金作りを教えてくれた。よく叱られたのを覚えている。当て金を作っている時に手で撫でて、手の脂が付くとすべって、やすりがかからなくなるし、やすりが切れなくなる。よく怒られた。金工は言葉や理屈ではなくて秘伝みたいなものがある。

⑬ 昭和初期の漆工科

左記は編者の質問に対する昭和六十一年七月十日付、寺井直次氏（昭和十年工芸科漆工部卒）の回答書簡の要約である。

(一) 入学した年の実習について

私達の時は予科はなく入学してすぐに本科一年生でした。一年生の実習時間は尠なかった。上級になるにつれて実習時間が増え、五年生になってからは教員免許修得希望者のみ関連教科を受け（週一、二時間だったか）その他は全時間卒業制作だったと思います（他に希望教科の講義を聞くことも出来ました）。一年生の実習は本堅地の塗の手板十枚だったか（五枚だったか）、呂色艶上げまで仕上げて学年末に提出するのでした。漆その他実習材